

〔論文〕

大正期ホーリネス・リバイバルの研究 (1)

黒 川 知 文

- 〈目 次〉 はじめに
1. 指導者
2. 思想
3. 運動の開始

はじめに

1918年に第一次世界大戦が終わり平和が回復され、日本では再臨運動は終息していった。国内は好景気を背景にして、最初のメーデーが実施され、社会主義運動が進展した。このような時代状況において、再臨運動を継承するかのよう⁽¹⁾に、1919年に、中田重治による大正期ホーリネス・リバイバルが生起した。

「リバイバル」とはキリスト者の信仰復興と未信者の回心を意味する。日本では、1883年に横浜のバラ宣教師による祈祷会での神体験が数週間継続し、東京・京都・大阪に広がった。1884年には同支社にリバイバルが起こり、200名ほどの学生が信仰を告白して、近畿、中国、九州、東京、群馬、仙台へ広がった⁽¹⁾。

大正期ホーリネス・リバイバルはどのような宗教運動であったのであろうか。

史料としては日本ホーリネス教団が出版した『日本ホーリネス教団歴史資料集』（同教団歴史編纂委員会、2004年）と『日本ホーリネス教団史』第1巻（日本ホーリネス教団、2010年）がある。前者は年表にすぎず、後者は網羅的にまとめられている。だが客観性にやや難がある。そこで、同時代史料である『聖潔之友』を使用する。

本稿では、この運動の指導者と思想、運動の開始状況と時期区分を明らかにする。

1. 指導者

中田重治は、1870年10月27日に青森県弘前市に誕生した。津軽藩足軽の家に生まれ、父兵作は米屋、三兄弟の三男であった。母千代は中田を行商をして育てた。東奥義塾に入学し、1887年に英語教師であるギデオン・ドレーバ

西暦 元号	時代状況	プロテスタント	カトリック	正教会
1912 大正 1	第一次護憲運動	第1回三教会同 救世軍ブース 記念病院開院		ニコライ東京で 逝去
1913 2	護憲運動デモ	全国基督教青年会大会	上智大開校	『正教思想』
1914 3	第一次世界大戦	<u>全国協同道</u> （3年間）	ド・ロ没	
1915 4	対華21条要求	全国協同道名士会		
1916 5		吉野作造論文発表	『光明』	
1917 6	ロシア革命	全国協同道終わる		
1918 7	ドイツ休戦条約	<u>再臨運動開始</u> 吉野作造ら黎明会結成 ヴォーリス近江療養院開設		
1919 8	パリ講和会議	再臨運動終わる		正教会憲法
1920 9	国際連盟成立	<u>大正期ホーリネス・リバイバル</u> 同志社大学設立許可 賀川『死線を越えて』 ヴォーリス近江セールズ株式会 社設立	『カトリック』	
1921 10	ワシントン会議	賀川豊彦イエスの友会		
1922 11	日本共産党結成	賀川『雲の柱』		
1923 12	関東大震災 甘粕事件	日本キリスト教連盟成立	『小羊』	ニコライ堂焼却
1924 13	第二次護憲運動	三教代表者会 全国教化運動		
1925 14	治安維持法・普 通選挙法公布	教会合同促進委員会		

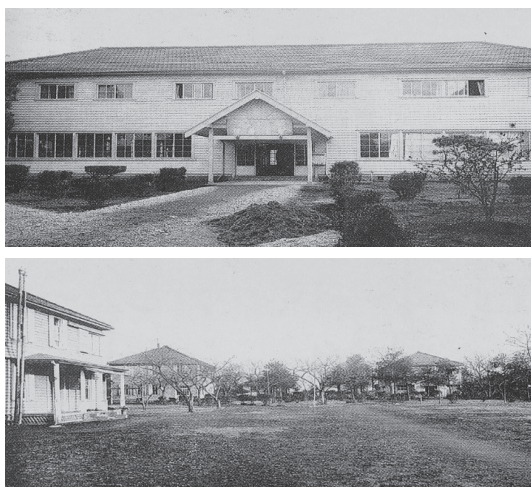
一より洗礼を受けた。その頃、藤田匡と被差別部落伝道をし、弘前市楮町に講義所開設し伝道者になる使命を与えられている。東洋英和学校神学部に入學するが、高等批評神学に合わず、勉強よりも柔術に集中した。また、兄久吉が牧会する熊谷メソジスト教会を助け、他方、別所梅之助と学生伝道に集中した。そのためか1891年に成績不良のために退学処分になるが、本多庸一院長により伝道師の仮免状を授与された。



中田重治

1896年、渡米してシカゴ・ムーディー聖書学院短期コースに入学した。校長はR・A・トーレイであった。中田は、留学中にタミル族伝道者ダヴィッドの集会で聖化の体験をした。1898年、同聖書学院を終了し、中田は欧米旅行後に帰国した。帰国後、メソジスト教会を脱会して、渡米中に親交のあったカウマン夫妻と神田神保町に中央福音伝道館を開設し、また柏木に聖書学校（後の東洋宣教会聖書学院）を開校した。1916年には、東洋宣教会ホーリネス教会を開設した。

カウマン夫妻は留学中から中田に経済援助をしていた。夫のカウマン（Charles Elmar Cowman 1868-1924年）は、ムーディー聖書学院信徒伝道コースに6年間学び、1897年に中田と出会い、1900年に日本伝道の召命を受けた。1901年2月に横浜から入国して4月から中央福音伝道館で中田家と同居して活動した。8年間、日本全国に聖書を配布する地方伝道隊の事業を実施した。東洋宣教会ホーリネス教会が成立した1916年に米国に帰り、ロサンゼルスに同協会の本部を移して総理になった。妻のカウマン（Lettie Bird Cowman 1870-1960年）は、銀行家の末娘として生まれ、結婚後、夫と共にム



柏木に新築された聖書学院1904年



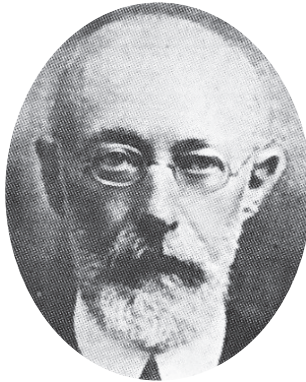
笹尾鐵三郎



カウマン夫



カウマン妻



キルボルン

ーディー聖書学院に学び、1901年に来日して、福音伝道館で伝道した。著書『荒野の泉』は300万部以上欧米で読まれ、和訳された。⁽²⁾

中田は1905年3月にカウマンと共に11月に東洋宣教会を設立した。中田と笹尾鉄三郎、カウマン夫妻、キルボルンの5名が運営をした。

笹尾鐵三郎（1868-1914年）は、慶應義塾中退後に渡米して入信した。そして米国で伝道した後、1894年に帰国した。東京と淡路福良で伝道した後、1901年に上京して中田と協力して、聖書学院で教え、同院長に就任した。

1912年には院長を辞して巡回伝道に従事していた。

キルボルン（Earnest Albert Kilbourne 1865-1928年）は、カナダのメソジスト教会員の家に生まれ、電気技師であったが、1894年にカウマンの感化により回心して電信伝道団を組織した。それが拡大して東洋宣教会を形成し、カウマン夫妻を追って来日して電信局伝道に従事した。

中田は、聖書学院では伝道方面を指導管理する役を担当した。中田はその後、中国、イギリスとアメリカを伝道旅行し、帰国後も日本全国に伝道旅行を実施した。

1911年、中田は新たに日本聖教団を設立することを宣言した。国内の伝道旅行の後、1917年10月25日より、東洋宣教大会が聖書学院で開かれて中田は、東洋宣教会から独立した新教団を設立する。

1918年、1月2日より、5日まで、神田教会で新年聖会が開かれ、中田は再臨問題の説教を毎朝した。そして、1918年1月6日、神田の基督教青年会館において、内村鑑三、木村清松、中田重治らの再臨運動が開始され、一年半にわたり全国で展開されることになる。その後にホーリネス・リバイバルが生起した。

2. 思想

内村と中田は、再臨思想における前千年王国論においては共通したが、相違点もあった。

内村とは異なる中田による再臨運動の思想は、第1に、聖化（聖潔）が再臨の準備として位置づけられている。根拠となるのは以下の聖書の言葉である。

すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません ヘブル書12:14

中田は、「聖くなければ」の文言を聖化の体験をしなければ、再臨する「主を見ること」ができないと考えたのである。

中田は、再臨運動が開始された1918年（大正7年）1月3日発行の『聖潔之友』巻頭において、すでに以下のように述べている。

主の来るのが近い、今年になって殊に近きを感じる・新年が目出度いのは真に救はれたる聖徒にとりてのみである。何故なれば聖徒は携へ挙られて主に遇ふことが出来るからである。大正7年に於て我等の為すべき事は数多くある。しかし其中で最も焦眉の急は聖潔のリバイバルの促進である。信者が若し全く聖く⁽³⁾なければ主に御目に懸る事が能きぬ。再臨の日に終の救を与へんためである。

再臨したイエスと空中で会う携挙は、信者が「全く聖くなければ」実現しないと中田は考えている。この一年後である1919年1月の『聖潔之友』においても、中田は「我清ければ汝等も聖潔あるべし」「人もし潔からずば主に見え⁽⁴⁾ゆることを得ざるなり」と述べている。

第2に、再臨の準備として、伝道して多くの人が救われることが必要だと説かれている。中田は以下のように述べている。

ひとりでも多く救われるならば、それだけイエスさまのおいでが近づいて来るわけになる。⁽⁵⁾

人が救われることはイエスの再臨を早める、という教えである。

中田は、すでに再臨運動が開始された1918年1月に、以下のように、同年においてリバイバルが起きることを述べていた。（傍線中田）

基督が千年期前に再来し給ふて、それから神の国が有形的に出来るといふ事に就ては一致して居るのである。緊急問題 宇宙の大問題 近々のうちに起るといふ切迫せる問題されば教派の異同を問はず我等同信の者は主は近しと大いに叫び、主の民をして預言の研究に一層注意せしむるよう努力すべきである。今年

は殊に驚くべきリバイバルが起こると信ずる⁽⁶⁾。

具体的にいかにして人を救いに導くかに関して、同年10月発行『聖潔之友』のトーレーによる「説教：救霊の要件（上）」では、「①凡ての罪をふりすてる事②神に対して全く服従する事③イエス・キリストの死を全く私共の立場として信頼する事④日々の生涯に勝利を得んために復活の主を信ずること」と論じられている⁽⁷⁾。また翌号においては「講演：救霊の要件（2）」において①種をたづさえる事②涙を流す事③出て行く事が提唱されている⁽⁸⁾。

第3に、再臨の前段階としてのイスラエルの救いを実現するために、イスラエルへの祈りが積極的にとられている。根拠は詩篇122篇6節の「エルサレムの平和のために祈れ、おまえを愛する人々が栄えるように」である。

中田は、1919年10月に「イスラエルの為に祈れよ」と題して以下のように論じている。

日本の基督教會はかのユダヤ人に關する知識^{くわん}を有つて居る事は極めて僅少である。基督の再臨を信ずる者が當然有たねばならぬ知識はユダヤ人に關する事である。これは今世界の大問題になつて居る。本紙の主筆はイスラエル人の爲に祈る祈禱團^{きとうだん}の日本會長に選まれ神田教會の野畑牧師は其副會長となられ毎月第一木曜日の夜祈禱會を開き此問題につきて研究して居る。伊豫松山のフランシス兄^{いよまつやま}は西洋人側の會長である。されば相共に此問題につきて大に運動せんとして居る。來る十二月の第一日曜日^{きた}を選び各教會に於て此事につきて祈りかつ説教するやうに計畫中である其日曜日を選びし理由は一昨年エルサレムが奪還せられし日に近いからである。本紙は來月下旬頃イスラエル號と題して特別號を發刊せんとして居る。諸兄姉の御加禱を乞^{こふ}⁽⁹⁾。

中田は、「イスラエル人の為に祈る祈禱團」の日本會長に選ばれ、神田教會の野畑新兵衛（1888-1990年）が副會長になり、毎月第一木曜日の夜に祈禱会と研究会を開いた。野畑は、慶應義塾大学卒業後のロンドン留学中に回心して伝道者としての召命を受けて1915年に帰国した。日本伝道隊聖書学校に

学んだ後、神田ホーリネス教会の初代牧師になり、1917年に中田の按手を受けて教職になった。

同年11月の『聖潔之友』には、説教「ユダヤ人の為め求禱」において、「彼等が一日も早く目覚めてイエスは全く真のキリストなりと認む



ホーリネス教会の天幕集会（名古屋）

べき事を神に祈禱すべき時にはあらざるか」とユダヤ祈禱団代表者であるテイ・アール・フランシスが述べている。⁽¹⁰⁾ 同年12月の『聖潔之友』には、イスラエル号として巻頭において「イスラエル人の為に祈るべし」と題し、「我等はただ祈るのみならず彼等の救の為に幾らにても献金し英米の伝道会社に送りて其伝道費の幾分にてもおぎないひたいものである」と論じられている。同号の論説では、テイ・アール・フランシスの「歴史上のイスラエル」、藤井武の「世界歴史の中心」、待夫の「イスラエル人の望」、山口龍造の「ユダヤ人の世界政策」等、ユダヤ人に関する論文が掲載されている。特に藤井武は、「人類歴史の中心はユダヤ人にある…やがて時が来るであろう。歴史の中心は再び舞台の正面に引出さるるであろう」と論じている。⁽¹¹⁾

3. 運動の開始

大正期ホーリネス・リバイバルは、1919年16日に開かれた淀橋教会の徹夜祈禱会に始まる。秋山由五郎、柘植不知人、小原十三司による祈禱会は、翌日の夜明けまで続き、17日から20日にかけては、信州飯田で聖会が開かれた。そして21日から23日にかけての三日間の断食祈禱会において、悔い改めときよめの体験を彼ら



淀橋教会（1913年頃）

がするのであった。

秋山由五郎（1865-1948年）は、18歳からの渡米中にシアトル第一バプテスト教会で受洗して笹尾と交流した時に日本伝道の召命を与えられた。シアトル第一バプテスト教会において伝道師の按手礼を受けて1895年に帰国し、笹尾とともにバックストンによる伝道訓練を受け、1905年に東洋宣教会に加入した。福音伝道館と聖書学院で教えた後は、全国巡回伝道者になっていた。

柘植不知人（1873-1923年）は、1913年に神戸で日本伝道隊による天幕伝道で回心し、受洗した。神戸聖書学校でバックストンに学び、1916年10月には大阪梅田駅裏通りで聖霊に満たされる体験をしてリバイバルの器として各地を巡回した。

小原十三司（1890-1972年）は、1908年に中田の説教により聖霊体験をして聖書学院に学んだ。1911年には仙台福音伝道館補助者に、1914年からは東京淀橋教会副牧師に就任していた。

『日本ホーリネス教団史』には、以下の記述がある。

3人が三日間、徹底的な悔い改めの祈りを続けるうちに、彼らはずいに「全くきよめられた」という確信が与えられて大きな喜びに捉えられ、その熱気を携えて再び東京に戻って行った。⁽¹²⁾

『淀橋教会創立100年記念誌』には、以下のようにリバイバルの開始状況が記されている。

小原十三司、秋山由五郎、柘植不知人等が信州飯田の山に籠り、リバイバルのために祈ることになった。深夜になって熱烈に祈り合う彼等のうちに認罪の霊が強く臨み、一人一人が涙と鼻汁混じりに己が罪を告白しあった。そのとき聖霊は焼き尽くす火をもって彼等の内に降られ、彼等を聖別しリバイバルの器と化し給うた。⁽¹³⁾ 遂に約束のリバイバルの火は、彼等の上に降ったのである。

中田重治はリバイバルの情報を得て、赤穂から急遽上京し、在京のホーリ

ネス教会に動員令を発した。

28日金曜日に神田教会で聖別会が開かれ、リバイバル状況が東京の諸教会に広がるのであった。

そのときにも霊火は燃え上がり、リバイバルが起こった。人々は号泣し、その罪をことごとく告白し合い、聖められ、聖霊に満たされた。不信仰と不従順をことごとくかなぐり捨て、主を第一として生活し、滅び行く同胞を救いに導くために一同は献身した。何処の教会の定期集会も盛んになり、宣教が促進された。⁽¹⁴⁾

祈りに始まり、罪の告白、聖霊に満たされる体験が集団的に見られる。これは、以下の、ペンテコステの火における聖霊降臨の聖書記述に類似するものである。

五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。

新約聖書『使徒の働き』2章1-4節

ペンテコステにおける「響き」や「炎」はこの時にはなく、外国語で話すこともなかったが、聖霊に満たされる体験は共通していることがわかる。

その後、約1か月間、リバイバル集会が日本全国のホーリネス教会でもたれることになった。これが大正期ホーリネス・リバイバルの開始状況であった。

大正期ホーリネス・リバイバルは、以下のように時期区分ができる。

	時期名	期間	展開した場所	主な出来事
1	開始期	1919.11-	東京・長野	淀橋教会徹夜祈祷会 信州飯田で聖会・神田教会の聖別会
2	展開期	1919.12- 1920.1	札幌・東北・東京・大阪	東京聖会・ユダヤ人問題研究会・神田教会の聖別会・人心改造運動福音宣伝大会
3	最盛期	1920.2-8	北海道・東北・東京・名古屋・大阪・神戸・岡山	リバイバル伝道会・日本全国リバイバル大祈祷会・「リバイバル大会宣言」採択・作西リバイバル大会・関西リバイバル大会・中京リバイバル大会・リバイバル運動天幕伝道大会・北海道リバイバル大会
4	衰退期	1921.9-	東京・大阪・九州	中田、米国巡回旅行 翌年9月迄・大阪秋季聖別会・九州心靈的修養会

〔注〕

- (1) 『キリスト教大事典』 教文館, 1991年, 1135頁.
- (2) 同, 282頁.
- (3) 『聖潔之友』 第587号
- (4) 『聖潔之友』 第639号
- (5) 『中田重治全集』 第1巻 477-478頁
- (6) 『聖潔之友』 588号 (1918年1月10日) 巻頭
- (7) 『聖潔之友』 第681号
- (8) 『聖潔之友』 第682号
- (9) 『聖潔之友』 第679号
- (10) 『聖潔之友』 第685号
- (11) 『聖潔之友』 第687号
- (12) 『日本ホーリネス教団史』 第1巻, 日本ホーリネス教団, 2010年, 391頁.
- (13) 『恩寵百年「恵みから恵みへ」』 宗教法人ウェスレアン・ホーリネス教団淀橋教会, 2004年, 49頁.
- (14) 同.